

コミュニティーのこのこ「郷土の歴史」講座②

7月29日は郷土の歴史講座の開催です。暑い中、多くの参加申し込みがあり、満席状態、コロナ拡大中もあり、丹念な消毒や換気に気を付け万全な注意を払って臨みました。

講師は昨年に引き続き、藤心地域ふるさと協議会、柏サンハイツ自治会で広報担当をされている荻野健二さんにお願しました。

前回、参加者に女性が多かったことから、今回は郷土に関わる女性を取り上げて頂きました。

「江口章子(あやこ)物語」と題して、その生い立ちから亡くなるまでの波乱に満ちた生涯について、軽妙な語り口で講演して頂きました。



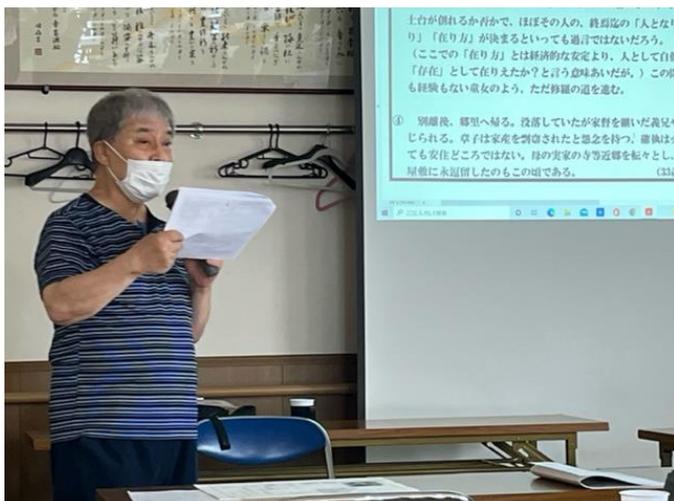
当増尾ふるさと会館から程近いところに少林寺があります。その山門前に「江口章子」の由縁碑、さらに進むと歌碑。

そこには有名な北原白秋との結婚、離別や少林寺ゆかりの戒仙禅師との結婚、土村増尾の辻堂への寄寓などが記されています。

歌碑には

「手賀沼の みずのほつりを さまよいつ 葦かる音を わがものとせし」の歌

荻野さんはここを端緒とされ、文献研究や現地調査を重ねられ、今回発表された12枚の資料にまとめられました。



新ふるさと・探訪 第20回 お寺・神社

少林寺 彷徨う詩人 129 707
江口 章子⑥

① 3月より8月迄9回に渡り、江口章子の生涯と人となりを継続してきた。今回で最終回になるが、このシリーズの冒頭に紹介した、少林寺境内の歌碑に立ち寄り、その和歌の意味を思い描いて同女への供養としたい。

「手賀沼の みずのほつりを さまよいつ 葦かる音を わがものとせし」

解釈のキーは「さまよいつ」と「葦かる音」？との思いは変わらない。普通、和歌や俳句は同時性を持つ。その何音かを観察考査して、その一言に響く作者の心情や情景を解釈してゆくのだが、資料なくこの一言のみからの推察で致し方なし。

「さまよいつ」

② 章子の不幸は血縁の「縁」の薄さから始まる。
4人兄弟の末娘として産まれる
6歳年上の兄を事故で失う(10歳の時)
異母を失って、異父3女を養育してくれた父を喪つて(11歳の時)
次姉を出産で失う(14歳の時)
大黒柱母を喪つて(17歳の時)
よき理解者祖母を失う(19歳の時)
家出した長姉を喪つて(25歳の時)
章子を見失った時、誤った時身近な内親は誰もが養育の人だったのだ。異母な行いを繰り返す章子、父母姉等からの養育の離れた「さとし・叱責・助言・交際」を受けようがなかった。

③ 奥娘としての故郷を失った章子、命の切れた風船直しく、どの船に生んでも落ちず。船似としての「故郷」も神えなかった。だからこそ、いや、それ故に距離、導導と離れ離れを繰り返す放浪の人生を歩む。現身在りである以上、心の在り様(よう)は、はかなく、もろく、激しく、粉雪の如く舞上がり、漂い、舞い落ちる。

④ 増尾在任時、東郷八幡近くの墓所付近に在った。墓々と通じていた、とある日の墓さき、この増尾の地が暫く前、それはあの白秋との初めての住まい「萬福・萬神院」と同じ！
「手賀沼の」距離にして4里程の所だ。フタアツく章子、白秋と別離の痛は癒えていた筈なのに、薄皮が破れ血が噴き出す。戒仙法師の群らいて、奇ある生活、安らぎも思念の外脚えきれない凄惨が胸の奥より噴出錯乱状態になる。草履を引っかけ外へ飛びだしていったのではないかと、林を、道を、田を抜け手賀沼にそそぐ。大津川へ。
増尾(さまよいつ)のが、自分らしいと、運命づけられている思い出したかの様に、安住は自分らしくない・・・と。

葦かる音

⑤ 日本国の古来の呼称として「葦原(葦原の國) (よあしはらみずほのくに)がある。豊かな葦の原が続く水辺の郷、かつての手賀沼のほとりに佇まば眼前に弘がる葦原は構文、弥生庶さかのほる「まほほの郷」。大和「やまと」の國の東風暮だ。

⑥ 葦(あし)と(よし)は同一のモノ。それが2にも及ぶ一語。あし→(あし)の語感が、(よし)→(あし)と響きあえられたという。並に国日本で(よし)と書かれ、日本では田原のまま(あし)と呼ばれていたそう。
義も例外もあるが、江戸葦原郷は有名だが、建礼寺院地は一帯が葦の原だった為、あし原郷とされ、後、よし原に実、字を「さそ」そこで「葦」に落ち替いた

⑦ 先日ふるさで、農家を営む土地の古老に聞いた。【葦を刈った事ありますか？】とどんな葦がしますか？と、古老答えて曰く、
【葦はあるけど葦は無い。
葦は葦(ススキ)の別名で山や野にある。葦は水辺のものだ。稲刈る葦は小畑で刈り取られ、長く刈り取る。葦は葦(ススキ)と違って大畑で刈り取らない。
葦の葉を後半で抱える様に抱き、両曲させ、右手の鎌で2〜3度切るようにする。昔は「スアックウ・スアックウ」重く乾いた葦の音だ。更に大きい葉も同様か？ 次で続く

** 次号では章子 歌碑の解釈の続きを掲載する ** (文責：荻野) 平成33年10月

純真で慕情多き「江口章子」の人生が浮かび上がってきます。講師自身が研究しながら「恋してしまった」と言われるほど、狂おしいまでの恋多き彷徨える女性が語られます。

身近なところにすごい人が関わっていたと思われた方もたくさんいたと思います。

今回もふるさと再発見につながったと、改めて感謝します。

興味ある方は、少林寺の碑や増尾辻堂などゆかりの地を訪ねられたらいかがでしょうか。

M. N 記